

News Letter

■2012年 5月 31日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

第22号から、「PBL教育支援プログラム」採択課題の成果報告をシリーズにて掲載しています。
第3弾は生物資源学部、高山進先生の「共通教育科目PBLセミナーG:生物多様性をはぐくむ商品づくり」における実践報告です。

2011年度開講「PBL教育支援プログラム」成果報告(3)

「共通教育科目PBLセミナーG:生物多様性をはぐくむ商品づくり」



2010年度の概要と課題

「環境にやさしい商品」という概念とその基準は社会的に十分模索されてきた。端的には「グリーンコンシューマー10原則」としてグリーンコンシューマー全国ネットワークが整理し、幅広く認知されてきた。一方、「生物多様性をはぐくむ商品」という概念は「生物多様性条約COP10会議」(2010年10月)を経るなどして社会的に注目されるようになってきた。この授業では、社会的に未確立ではあるが必要性の高い課題に対して、若い感性を活かした「商品づくり」企画に取り組んでもらうことを目的とした。すでに各地で行われている関連する事例の分析を手掛かりにするが、最終的には「COP10会場で売りたい、生物多様性にやさしい、私が欲しい商品」を提案してもらい、という設定にした。したがって典型的には「プロジェクト型PBL」であった。

プロジェクトに入る前提として、①「環境にやさしい商品」という概念とその基準を学び、②生物多様性の損失や劣化を引き起こす要因の理解をし、③現実におこなわれている関連するコミュニティビジネスの実例を調べ学んでもらった。その上で、④「生物多様性の問題解決を目指した」コミュニティビジネス(社会的企業)の手法を参考に、「架空の事業企画の場合、現実の事例をとりこめるところはとり込みながら、細かいところは気にせずに思いきったアイデアで勝負してください」という指示を出すことで「自己決定的」にアイデアを膨らませてもらった。

学生にとって身近な「生き物」「商品」から入って、あまり普段考えたことがないと思われる「生物多様性と社会」「社会的企業」「コミュニティビジネス」「地域の問題解決」といった課題に果敢に乗り出してもらうのがこの授業の意図である。

最終的には、生物多様性に関する問題の解決を目指しながら、同時に自分たちが(世の中が)受け入れる商品が作れるか、継続できるビジネスにすることができるか、を熟慮してもらうことを意図した。

本授業においては、PBL教育の基礎要件として三重大学高等教育創造開発センターが上げている「問題解決という学習過程を経る学習」や「学生による自己決定的で能動的な学習」という要素を意識的に組み込もうとしたのである。

ところが、学生のアイデアは面白いのだが、パートナーを大手企業にして売り上げを過大に見積もりすぎる等、提案内容の現実味を欠く事例が多く出てしまった。この年の展開から、筆者はPBL教育においては「現実の事例に学ぶ」(いわゆる「調べ学習」)という側面と「学生の自己決定に任せる」(調べたことをもとにしながらも企画・提案といった「創造」の要素を加味する)という二側面のバランスが重要なポイントになり、どちらが過大(過小)になりすぎてもPBLの良さが失われることに気づかされた。



2011年度の実践

2011年度は上記の課題を意識して改善したことがいくつかある。第一に、時間の関係で「環境にやさしい商品」に関する学習をカットした。第二に、昨年のビジネスワークシートを改善し、「5Pのビジネスモデルワークシート」「地域資源分析ワークシート」の二つを用いて、2010年度の学生の作品を分析し、非現実的になっている部分の改善点を考えさせた。第三に、現実の事例を参照しやすいように下記4つの既存のデータベースを紹介した。

- 「三重のバイオトレジャー」
- 「三重の食応援ブログ」
- 「三重ブランド」
- 「三重の里いなか旅のすすめ」

そして12月8日には学生に図1のような指示を出し、学生のスタンスを明確にした。

成果

このように現実社会に関わる学生のスタンスを、架空ではあるがリアリティを持って設定することに

よって単なる「調べ学習」から一歩脱皮して、企画力、説得力、提案力、を発揮する動機づけが生じることになり、4つの力(とりわけ生きる力)の養成につながるのではないかと考えた。また、「問題解決のプロセスでより高度な理解を得る」というPBL教育の利点は、このようにモチベーションを与えることで、高度に発揮されると思われた。PBL教育の醍醐味を実感させられた私にとっての飛躍の経験であった。

生物資源学部 高山 進

PBLセミナー「生物多様性をはぐくむ商品づくり」ラストセッションの進め方 (2011.12.8)

○設定:あなたは地域おこしの支援をめざす学生集団です。

あなたが注目した商品の長をさらに活かし、かつ現在抱える問題点を解決する提案、売り上げを適度に伸ばし、かつ地域に貢献する提案を「その地域にいるパートナー」もしくは「都会のパートナー」に提案してください。

○できる限り事実に立脚するように努力してもらいたい、若干の「想像」を含めることは構わない。

○「パートナー」は企業、団体、行政、愛好者集団、NPO等であるが、大手のものをねらう必要はない。

○まず現在とりあげている商品・事業について正確に把握する。

- ・5Pのビジネスモデルワークシートで把握する。
- ・資源分析ワークシートで把握する。
- ・その商品の魅力の源を把握する。地域の特徴とのかかわりを押さえる。
- ・他の類似商品と多様な側面で比較する。

○そこにある課題を発見する。

- ・供給力不足か ・顧客の不足か ・担い手不足か
- ・販売ルートの未確立か
- ・商品の魅力を引き出しきれていないのか

○課題の解決法を考察する(成功すれば地域おこしになる)。

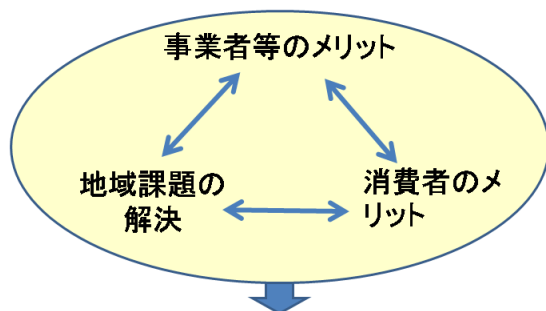
- ・その地域にいるパートナー、協力してくれる都会のパートナーを発見する。
- ・その地域にある別の資源と結び付けて商品の質を上げる。
- ・商品の魅力アップ策を考える。他の資源との絶妙の組み合わせを探求する。
- ・フラッグシップ商品を考案する。一つ完成品を作る。 ・担い手を増やす方策を進める。顧客に参加してもらう。 ・行政の政策を変える働きかけをする。

○課題解決に向けて動く。

- ・パートナーへの提案書をまとめる。 ・他の資源との組み合わせ方について通の意見を聞く。
- ・行政へのロビーイングを行う。

○生物多様性(社会的意義)とのかかわりをアピールする。

- ・どのようなつながりかを論理的に把握する。 ・アピールの仕方はひかえめに背景情報として提供する。基本は商品に魅力があるから買ってもらいたい、というスタンスで。しかしこの点もしっかりアピール。



貴パートナーの協力で相乗的な新たなメリット(「三方よし」関係)が生まれます。自分たちは地域を社会をよくしたい、というスタンス。

図1. 学生への指示

三重大学学芸員養成課程委員会発足記念 学術講演会 のご案内

学芸員養成課程委員会の発足を記念し、2012年 6月20日(水) 13:00~14:30(場所:三翠ホール 小ホール)にて学術講演会を開催いたします。講師は、奈良国立博物館学芸部長の西山 厚氏です。ふるってご参加ください。